



## 国賠同盟第41回全国大会

6月19日～20日・東京

来年 治安維持法公布100年 2万人の同盟建設へ！

山口県本部版  
NO 310  
治安維持法犠牲者  
国家賠償要求同盟  
山口県本部  
〒754-0004  
山口市小郡金堀町  
21番の1  
林洋武方  
電話&FAX  
083(972)3987

◆ 同盟設立当初200人いた治安維持法犠牲者も、その多くが故人となられた現在、私たちの運動を次の世代にどう継承していくか、次の全国大会に向けて名称を含めた活動の進め方の議論を開始しようと呼びかけ。

今こそ同盟の出番だということ。

◆ 同盟は不屈に反戦平和を訴えた人たちから学ぶという特徴を持つた運動体であり、学習を通じて運動を前進させようと訴え。



【写真】同盟全国大会で来賓あいさつする  
日本共産党山添拓中央政策委員長。

# 今も生きている河上肇の足跡

その4

河上肇記念会全国世話人 加藤碩(ひろし)

この一冊はなかなかの大作で、河上自身、上篇について「私の著作は『資本論』の全三巻に亘る内容をほぼ平均的に紹介しておき、且つマルクスの研究法および叙述法を出来るかぎり尊重している点において、善かれ悪しかれまだ世界に類本がないと考えている。」とカウツキーの同種の本が『資本論』一巻に偏つていることも上げて、自信たっぷりに述べています。

また下篇は、マルクス以前の西欧の経済学者の諸理論をアダム・スミスを中心にして、アダム・スミスの先駆者としてのケネー、モンテスキュー、ロック、マンダギル、ヒュームを紹介した後、労働価値説一人間社会において新しい価値を生み出すの

は人間労働のみであるとする一を明解に主張したスマスの功績を丁寧にあとづけています。ページ数も相当とて、河上自信のスマス研究の成果をしつかりと紹介しています。

さらに続いて、マルサス、デビット・リカアドウースミスの労働価値説をもう一步緻密に発展させたとされている学者です。ジェームス・ミル、ジョン・スティアート・ミル、カアライル、ラスキンへと叙述をすすめています。

この大作も、二十刷、三十刷と刷りかえられたようで相当のペスト・セラーブリがわかります。

この『経済学大綱』に関する講義録として使われていたもので、ます。当時の京都帝大経済学部

河上肇教授は、「これらの講義録は明日講義するときには、何日か前から準備をして新しいインクできちつと清書して、



京大を追われた頃 (1928年)

事件に触れておかなればなりません。

大正の末から昭和初年にかけての事件で、治安維持法という弾圧立法が出来て、その適用第一号がこの京都学連事件でした。京都大学をはじめ、大学生や旧制高等学校の学生が左翼化しているとにらんでいた警察当局が、京都帝大をはじめ全部で三十八人の学生を一気に逮捕したとじられます。また、これらの西洋の理論家の著作を直接ドイツ語や英語の原書にあたって、講義録にされていることも貴重であり、ご紹介しておきたいと思います。

された学生の多くが、河上教授の教え子、つまり河上ゼミの学生であったことから、河上肇自身が疑われて、家宅捜査その他を受けたわけです。さらにそれが加えて、一九二八年二月に行われた最初の普通選挙となつた総選挙で、大山郁夫、山本宣治らの選挙で行つた応援演説も問題にされて、河上肇は京都帝大を去らねばならなくなります。

すでに国立大学の教壇から『資本論』の体系を公然と経済原論の講義として行うことは無

理な情勢となつてゐたわけです。

『経済学大綱』は、京都帝大を去るに当たつて、河上が経済原論と経済学史の講義録を出版して、大学を去つたという書物でもあるわけです。この本の序文を少し、紹介します。

「要するに私は、最初ブルジョア経済学から出発して、多年安住の地を求めつつ、歩一步マルクス主義に近づき遂に最後に至つて、最初の出発点とは正対なものに転化しおえたのである。かかる転化を完了するためには、私は京都大学で二十年の歳月を費やした。このことは私の愚鈍を証明するに他ならぬが、しかしながら私の現在の立場をもつてマルクス説に対する無批判な盲信に立脚するものとなす一部の世評に対しても、或いは一つの抗弁となすに足るであろう。」つまり、私が無批判なマルクスの盲信者だといふものがいる

が、それは違う。私は二十年間かけて古い経済学説の批判的検証を通して、マルクスにたどり着いたのだということを述べてゐるわけです。

「顧みれば、私のマルクス説への完全なる推移は、軽蔑に倣するほどの多年に亘る躊躇と折衷的態度との後に、ついに実現されたものである。だが思索研究の久しきを経て漸く茲に到達したる代わりには、私はたとひ火にあぶられるとも、その学問的所信を曲げがたく感じている。」と続けています。

彼はここまで到達した、理論的、思想的な立場を持つて、『資本論』の翻訳と『資本論入門』の執筆にかかります。

『資本論』の翻訳についても河上肇はなかなかの自負を持っておりました。ただ原文の意味を文法的に誤り

のないように日本語に置き換えさえすればよいと云うようなものではない。原文が持つてゐる特殊な精彩、鬱勃たる革命の気迫、こうしたものを作り出さなければ、薔薇の花は移植しえてもその芳香を棄てたものである。

そうした点を考慮したなら、語学に堪能な人や知識の該博な人などは他にいくらもあるけれど、やはりこの書の訳者としては自分が第一等の適任者である」と述べています。

当時、『資本論』の訳としては、高畠素之訳のものが出ており、一番普及していたのではないか

と思います。私も、もう故人となりましたが、私の配偶者の父が戦前から隠して、この本を持っていたようで今、手元に持っています。ちょっとながら見てることは度々あるのですが、本当に読みづらい本です。私は自分がうまく読めないので棚にあげるのもなんですが、訳が悪いのではと思つています。河上の『資本論』翻訳に関するこの発言は、私にはどうも高畠訳を指して言つてゐるよう思えてならないのです。その人間性、思想性が自分ぐらいの水準にならなければ、なかなかこの本は翻訳できないのだぞ、と言つてゐるわけです。そんななかでも河上肇が勇敢に、そして情熱的に翻訳に取り組んだことをご紹介しておきたいと思います。

昭和二年十一月二十八日、東京青山会館における演説



## 私の戦争体験 北朝鮮の難民であつた頃（7）林洋武

飢えと寒さが襲つてきた。

強制収容所に入れられたときにはそれぞれ多少の食料を持っています。しかしそれも一ヶ月分ぐらいでした。当時のソ連軍は収容したが日本人の食料のことは考えませんでした。それどころではありません。順安は米どころでしたのでソ連軍は大型のトラックを大量に投入して近辺の農村から米の供出を強要して順安駅で貨車に積み替えてどこか運び続けました。ソ連も長い戦争で飢えていたのです。彼ら自身の食料の調達に必死でした。しかも収容所にいる日本人を無償でかり出し詰め替え作業をしました。保安隊もはじめはソ連の言うとおりでしたが収容所の監視を緩めて日本人の外出を許し食料の配給も始めました。しかし、その量と質は恐ろしく貧弱のものでした。

敗戦の一年前ほどに大阪から栗本鐵工所という工場が順安に疎開してきました。それまであつた砂金会社は大量な金を掘りきつて開店休業になつていきました。その跡地に大阪の工場が疎開してきました。家族連れで疎開したひとたちもおり順安国民学校も十数人の仲間が増え大阪弁もまじえて賑やかになりました。彼らは一様に「白いご飯と三食満足に食べられる」と喜んでいました。

敗戦になるまで日本人の間には食料の不自由はありませんでした。ところがソ連軍の配給はコウリヤン（キビの一種で朝鮮や北方の主食だった）と粟が中心で豆かすなどが混じっていました。豆かすというのは大豆油を絞つたかすです。板状になつていて丁度敷石のように固め되었습니다。豆かすはかなり時間をかけてにないと食用にはなりません。その燃料も大変になりました。炊事は収容所の中庭（野外）にそれぞれの家庭が自炊することになりました。順安の気候は乾燥していますが冬はかなり寒いのです。特に敗戦の冬とその翌年は零下20度を超える寒さが続きました。直径二〇センチもあるリンゴの木が音を立てて寒さで割れています。クラブには暖房装置は何もありません。もう10月になると寒さが襲つてきました。収容されるとき着るものは「一人三枚まで。布団は一組」など決められていました。満州からの避難民の人たちには在来の人たちが布団など提供しましたが本格的の寒さに耐えられませんでした。夜になると集会所に「おなかがすいた。寒いよう」という子供の声が集会所に響き渡ります。だけど親たちは叱るだけで何もできない今まででした。炊事用の薪も不足します。朝鮮では元々木が少ないところでした。暖房用にはキビがら、わら、粟がらなどを使つていましたが、敗戦後日本人にはそれも思うようには入りません。暖房はなく食事も日々悪化していきました。（つづく）